

コミュニティーバス盛り上げから得られる教育的効果

伊藤圭一

I. はじめに

キャリアプランニング科にはゼミナールと言う必修科目があり地域と連携して地域の問題解決を行う取り組みをしています。私のゼミナールは、豊橋市下地地区、大村地区を走るコミュニティーバス「かわきたバス」の利用促進活動を行っています。この活動に取り組み始めてから2年目になります。交通というテーマは女子学生に馴染みにくいのではという心配もありますが地道な取り組みを行っています。この取り組みは来年も継続する予定です。継続期間が長くなる前に今までのまとめを行い、これからの取り組みへの足掛かりにしたいと考えました。そこで、こうした取り組みが分類される問題解決型学習（PBL型学習）についてまとめるとともに、その学習の評価はどうしていくべきなのかをまとめていきます。それを通してコミュニティーバス盛り上げから得られる教育的効果を考えていきたいと思います。

II. 問題解決型学習（PBL）について

II-1 問題解決型学習（PBL）とは何か

問題解決型学習（Project Based Learning）、これは別名「課題解決型学習」とも呼ばれ、知識の暗記などのような学生が受動的な学習ではなく、自ら問題を発見し解決する能力を養うことを目的とした教育法のことを指します。学生自身の自発性、関心、能動性を引き出すことが教師の役割であり、助言者として学習者のサポートをする立場で授業を進めて行きます。また、正しい答えにたどり着くことが重要ではなく、答えにたどり着くまでの過程（プロセス）が大切であるという学習理論のことで、1900年代初頭アメリカの教育学者ジョン・デューイが初めて教育現場で実践に取り入れたとされています。¹⁾

このPBLは現在文部科学省が進める「アクティブラーニング」の教育方法として非常に注目を集めています。そこでまずは文部科学省が力を入れている「アクティブラーニング」について理解する必要があります。アクティブラーニングの目指すところは「正解・解答のある課題に取り組み知識・技能を得ること」ではなく、「正解のない議論（課題）を通して問題解決へのアプローチ方法を身につけること」です。最終的に「主体的・協働的に問題を発見し、解決する能力」を養うことを目的としており、文部科学省が力を入れているのは、そ

1) 溝上慎一『アクティブラーニングとしてのPBLと探求的な学習』東信堂、2016年、p.8

ういった能力を学生が身につけていくことを期待しているからです。

Ⅱ－2 PBLの進め方

問題解決型学習（PBL）では次に挙げる6つのステップを踏んでいきます。

- ① 問題に出会う（テーマを決める）
- ② どうしたら解決できるのか実践的・論理的手法によって考える（解決策を考える）
- ③ 相互に話し合い、何を調べるのか明確にする
- ④ 自主的に学習する
- ⑤ 新たに獲得した知識を問題に適用する
- ⑥ 学習したことを要約する。²⁾

このすべてのプロセスを経ることで、最終的にこれらの過程で答えにたどり着くまでの過程（プロセス）自体が重要であるということを学習します。

PBLの教育方法には「チュートリアル型」と「実践体験型」の2つ方法があります。「チュートリアル型」は一つの課題に対して仮説をたて、仮説を先ほど紹介した6つのステップにそって検証していく方法です。一方「実践体験型」は課題を実社会の中に設定し、民間の企業など実社会に入り込みながら、6つのステップを踏んで問題を検証していく方法です。2つの方法のうち「チュートリアル型」の方が実施することが容易なためPBLの主流な学習方法として行われています。

PBLはもともと医学教育から始まっています。なぜ医学教育の現場から始まっているかというと、SBL（Subject-based Learning）と呼ばれる旧来の暗記型、基礎から応用に順次進んでいく学習法では、自分たちが学習している膨大な知識を医療の現場と結びつけて考えることが難しいという問題点が医学教育にあったからです。³⁾ そこで解決策として、PBLにより、医療現場には知識が必要であるということを実感してもらい、共に医療現場で従事するグループに貢献することの重要性を学習するとともに、医療現場につながる知識学習に対するモチベーションを維持する方法として考案されました。PBLについて書いたDonald R Woods著『Problem Based Learning - how to gain the most from PBL』という本にはPBLとSBLについて、以下のように例示してあります。

従来の学習方法であるSBLでは、学生たちははじめに電気に関する一般的な知識を学習させられ、その中で電気の熱エネルギーへの変換が解説されます。続いて電気機器の原理や構造について学習し、機械の機能が想定した通りに動いているか確認するためテスターの使用方法などを学びます。最後に「故障したトースターを修理する方法」を課題として出されます。

PBLではSBLの学習順序とは真逆で、はじめに「故障したトースターがあります。これをトースターとして機能するように修理するか、修理が難しいようであれば、少しでも機能するようにしなさい」という課題が出されます。学生は故障したトースターを修理するために

2) 同上書, p.9

3) 同上書, p.6

は、どんな知識が必要であるのか、その知識を得るためにはどの分野について学習しなければならないのか、こういった道具が必要であるのか、道具を正しく使うための知識などの課題を学生自身が見つけ出し、トースターを修理するという問題解決に向けてさまざまなアプローチを行います。例えば、はじめに斜め45度の角度からトースターを叩くと機能するという仮説を立てて機能回復を図ろうとする学生がいるかもしれません。しかし、その方法では最終目標の修理までは到達できないことがわかり、構造を学び、電気に関する知識を学び、熱エネルギーについて学生自身が自発的に学んでいき、課題であるトースターの修理まで能動的に学んでいくということがSBLとのプロセスの違いです。

Ⅱ－３ 教育効果の高い問題解決型学習（PBL）の３つの特徴

すでに多くの大学がPBLを取り入れ、学生の学習意欲を高めて、効率的な学習につなげています。教育効果が高いPBLには以下のような特徴があることが調査により判明しています。その特徴をおさえ、チュートリアル型、実践型の授業をおこなっている学校の好例は次の通りです。

■特徴①

教育効果を高めるための実践的なプログラムとして工夫されていること

（長期、有給、PBL型、海外、地域連携、低学年向けなど）

■特徴②

学生・企業に対するサポート体制が確立されていること

（コーディネーターを配置している、実習内容を適切に評価する仕組みを整備しているなど）

■特徴③

大学などにおいてはインターンシップの実施にあたって組織的に関与していること

（単位化している、希望者全員を受け入れる体制を整備等）⁴⁾

・チュートリアル型PBL授業の進め方の代表例 三重大大学の例

三重大大学ではPBLを「学生による主体的な学習活動が中心の授業」のことに定義しており、教員の役割は何かを教えるのではなく、学生の学習を支援することとしています。またPBL授業には次のような特徴があるとしています。

- ・ 4～8人（授業によって変わります）の学生で1つのグループを作り、学習に取り組む
- ・ 予備知識に関わらず取り組むべき問題事例が示される
- ・ グループで問題解決のための学習計画を立てる
- ・ 授業時間外に個人で自己学習を進める
- ・ 学習に必要な学習資源（文献・資料）も自分で適切なものを選択する

PBLの授業の進め方の一例として、次のようなものが示されています。まず、授業時間内で学生にとって身近な、もしくは卒業後の仕事の場面で直面する問題や課題を示す事例問題

4) 同上書, p.15

が教師から提示されます。次に教師から提示された課題について、学生たちが主体となって全体で問題の本質が何か考え、解決のために何を学習すべきか決め、またどのような学習資源で学ぶかを決め、次回までの学習計画を立てます。学生たちが話し合っている間、教師はファシリテーター（促進者）として支援を行います。

そして、授業時間外に自己学習として行った活動や調査など学習内容を記録して、学生のグループメンバーに報告する用意を整えます。次の授業時間では、全体で自己学習成果の報告を行い、学習内容に基づいて問題解決案の作成や追加的に学習すべき内容をリストアップしていきます。必要であればもう一度授業時間外で自己学習を行い、また全体で自己学習の成果報告・課題解決案の作成を繰り返す場合もあります。そして、授業時間内もしくは授業時間外で教師の支援を受けながら、学生自身で行った自己学習をもとにグループとしての課題に対する成果発表の準備を行います。ここでも効果的なプレゼン方法はこういったものかなど学生たち自身が考え、より良い方法をグループで作り上げて行きます。

最後に自己学習とグループで学習した成果を全体の前で発表し、教師の評価を受けて、PBL授業は終了となります。あくまでPBL授業の一例ですが、三重大学が取り入れているPBL授業では、いかに学生が主体的に授業に取り組まなければならないのか、教師の役割はどんなものかがよくわかる好例となっています。

・実践型 PBL授業の進め方 小樽商科大学の例

小樽商科大学では、実践体験型のPBLとして小樽を中心とした北海道後志エリアの自治体や民間企業等との協働で実施しています。地域課題解決や経済活性化のプロジェクトを3～6ヶ月間の中長期に渡って実施しています。そしてその過程において、学習動機や理論・手法の応用力の獲得、プロジェクトマネジメントを通して社会人基礎力の獲得や向上を目指しています。

①事前学習

このPBLを実践した授業では学生がプロジェクトを考えて取り組む「提案課題型」コース、または大学から与えられたテーマに取り組む「選択課題型」コースの2つのコースから学生が自らコース選択をすることができます。選択後にはプロジェクトの事前学習として、目的や課題の確認、対企業のマナー講習、スケジュール作成、達成目標の設定などを行います。

②実習

事前学習が終わると実習に入ります。6ヶ月の実習の場合、1ヶ月目は商店街の現状把握、観光客動向調査などを実施。2ヶ月目～3ヶ月目は、商店街でのヒアリングを実施しました。さらに調査などでわかった結果を踏まえて、認知度アップのための事業を商店街振興組合と共同で検討を開始。4ヶ月目～5ヶ月目には、事業内容の検討結果などの中間発表会を開催しています。また、その発表会での意見を踏まえて、商店街振興組合と事業の再検討を実施。最後の6ヶ月目には、再検討結果を最終成果報告会で発表して、成果物を大学と商店街振興組合に提出しています。

③実施結果

これらの実習により、地域コミュニティの課題への学生の関心や理解度の向上、またプロ

ジェクトを通して実践知の向上などが見られました。学生が自らコースを選択できるので、より自分が関心のあることに意欲的に取り組めるようになっています。また、商店街振興組合とのやり取りも多くあり、学習できる機会が確保されていることが好事例の要因と言えるでしょう。

Ⅱ－４ より質の高い学習が可能な学び

PBLの基礎的な知識から導入のポイント、手法や事例について挙げました。PBLを実践する際には、導入事例を参考に各校の評価のポイントを押さえて学習すれば、より質の高い学びの機会を得ると考えられています。

Ⅲ. ルーブリックを用いた評価

Ⅲ－１ ルーブリックとは

「ルーブリック」は一言でいうと、生徒や学生の学習到達状況を評価するための評価基準のことです。ルーブリックは複数の項目から成りますので、それを一覧表にしたものを「ルーブリック表」といいます。そして、そのルーブリック表を使って評価する方法を「ルーブリック評価」と呼んでいます。

資料1をご覧ください。評価する項目（これを「評価規準」といいます）が左端に縦に並んでいます。ここでは、ゼミナールの活動に関する4つの評価規準が記載されています。右から4, 3, 2, 1と並んでいますが、それぞれの評価に値する基準が書かれています。ここに書いてあることが出来ていれば、このランクの評価が得られるということです。よく見ていただけると分かると思いますが、左の欄の項目が一番ハードルは低く、右に行くにつれて、出来ていなければいけないことが増え高度になっています。「取捨選択した情報を課題解決の目的に合わせて論理的に分析することができる」とはなかなか実践が難しいです。だから、ここまで出来ていれば4点満点の評価がもらえるというわけです。この表を使って学生を評価することになるのです。

Ⅲ－２ 評価方法

基本は、教員が学生の学習活動を見ていて（観察して）、この表の基準に従って、一人ひとり評価します。ゼミナールは9人ですので、1人の教員がこの表に基づいて評価を行う事は可能です。今回は、学生の自己評価及び学生同士の相互評価を活用する方法を取り入れました。学生がアンケートに答えるような形で自己評価をします。加えて、学生がお互いに評価できるような内容であれば相互評価をします。それと教員の観察と合わせて総合的に評価するのです。評価には主観が入りがちですが、ルーブリックは他の評価に比べて客観性が保てるような仕組みになっています。なぜなら、基準が明確に設定されているからです。すなわち、ルーブリックは、何が出来ているとその評価なのか明らかなので客観性が高くなっています。

そして、ルーブリック評価で大事なことは、取り組みが始まる前に、学生にもルーブリッ

クを確認させることです。つまり、これから行う取り組みで何が出来ようになったら評価が高くなるのかをあらかじめ意識しておけるのです。このことで、学生はルーブリックで示されている項目（評価規準）を意識しながら学習することになります。ルーブリックが示されることで、教員も学生も目標を共通認識することができます。つまり、学生も自己評価や相互評価が出来るということです。

IV. ルーブリックをゼミナールに活用

ゼミナールの活動はどうしても評価が主観的になりがちであること、動く学生と動かない学生の差が激しいことが問題として挙げられます。しかし、ルーブリックを導入することでその問題が解決できるのではないかと考えました。

身につけたい力を、

- 1 地域課題の解決の為、情報収集し分析する能力
- 2 地域課題を解決する能力
- 3 修得した知識・知見を活用する力
- 4 グループを引っ張る力
- 5 他者と協力する力

の5つの項目にしました。⁵⁾

まずは、講義の最初にこのルーブリックを示してゼミナールの方針を学生たちに伝えました。

- ① 4月 ゼミナール開始時
- ② 7月 イベントを実施した後
- ③ 10月 創造祭実施の後
- ④ 12月 成果発表会の後

のタイミングで、このルーブリックでの自己評価と他己評価を実施しました。

①の時期：ルーブリックを示すことで学生に評価基準が明確化されたことにより学生も「連携活動で自分がどう動いたらよいか」を理解できたようでした。

②の時期：7月の花育イベント（資料2）の際にも何もしない学生は存在せず、「イベントの振り返り」でも建設的な内容が記述されていました。（資料3）特に、「良い学生をきちんと見ている」ことが感想からも見て取ることができます。自分はできなかったけれど、他の学生はきちんとやっていたことを「見る」ことで自分の行動を振り返ることができるため、できなかった自分を反省するに留まらず「どうすべきだったか」と言うところまで自発的に考えることができたと言えます。

③の時期：その振り返りの成果か模擬店も全員参加で何ひとつ苦情を言う学生はありませんでした。

④の時期：成果発表会に向けての行動も役割分担をきちんと行い怠けるものなく進行をしていきました。成果の発表を行うということになると、どうしても「スライドの出来」や

5) 同上書、p.28

「しゃべりのうまさ」など外観上（ある意味で表面的な評価，結果だけで見てしまう）評価につながりがちですが，ゼミ内での成長を冷静に評価でき，その上で「他のゼミ」と比較もできたと思います．成果の可視化ということとともに「ゼミナールでの活動の方針の可視化」で得られた成果が大きいように思います．

自己評価については心配していた「謙遜」は見られず，的確に回答をしていました．相互評価については，ゼミ長，グループ長に高い評価が集まっていました．これも「長」のポストの学生がその役割を的確に果たした成果だと見ることができます．

V. まとめ

コミュニティバス盛り上げから得られる教育的効果は何かと問われれば，直接的には「地域の交通の維持は超高齢社会においては必要不可欠である」と言う事理解であり「必要なものに対して維持する努力が必要」であるという現実を知ったことであると思います．それ以上に，ループリック評価の評価者として自分をそしてクラスメイトを評価することで，自分に欠けていること，そして自分のすべきことを見ることができたと考えられます．この取り組みを通じて，社会人になり活動をする際に，「ループリック」を思い出し「自分のすべきこと」を意識できるようになったと考えられます．これはすなわち，学生が社会人への道筋を得られたと考えています．

本稿は，2019年8月23日に行われたFD実践研究会での取り組み事例の発展をベースに書き加えたものである。

みんなの感想（学生の感想は原文のまま掲載しています）

（資料3）

- ・みんな協力出来ていてとてもよかったです。しかし、せっかく来ていただいたのに時間がギリギリで、メインの花育にあまり時間をかけられず急いでと急かしてしまった所は反省点だと思います。みんなの頑張りもあってたくさんの人に来ていただいたのは大成功だと思います。
- ・皆で集まり、当日の予定や進め方を確認出来なかったのが反省点です。実際、会の進め方がわからず何度も助けを求めることができました。ですが、お越し下さった方々はバス停までお見送りした際に、「本当に楽しかった、またこのような企画をしてほしい」と言っていました。あんなにも進行も時間割も上手く出来ていなかったにもかかわらず、嬉しかったです。また開催出来るようにしたいです。
- ・帰りに参加された方が楽しかったとお礼を言ってくれたので良かったです
- ・バス停から渡し船まで私たちが案内しないといけないのに、河北バスの会長さんに案内してもらっちゃいました。ご飯を運び終わったら終わっちゃってたのであっとゆう間でした。
- ・私はあまり参加してる方達と話が出来なかったけど、花育中にちゃんと金城さんや金子さんが積極的に声を掛けていて、緊張していたはずなのにすごいなと思いました。参加する方の人数が2名でしたが、8名に増えてにぎやかになってよかったです。ランチ中になにか話さなきゃと思っていても焦って何も浮かばなくて全然話せず、そこが今回の反省点です。やっぱりパッと話が浮かぶ先生方は凄いなと思いました。時間が少しおしてしまっって、何かトラブルが起きたりしないかと不安でしたが、無事に終わって安心しました。
- ・初めての企画で緊張しましたが、参加者みんなが楽しく花育やランチをしているところを見て、嬉しかったです。ただ、あまり参加者と話すことができなかったのと、参加者の配慮が足りなかった（ご飯の量、メニュー選びなど）のが心残りです。
- ・あまり段取りを決めずぶっつけ本番みたいな感じでスタートしましたが、無事に成功してよかったです。全員が臨機応変に対応できたのがよかったのかなと思いました。でも、やっぱり少し時間が短いなと思ったので次回開催する時はもっと時間に余裕を持ちたいです。

伊藤ゼミナール

（資料2）

「かわきたバスと牛川の渡しで花育体験をしよう」のイベント実施

5月 イベントミーティング

イベントを7月に行おうという事で市役所の方に来ていただき、ミーティングを行いました。チラシを作り、沿線の方に告知をすること、期限をいつにするか、ターゲットをどうするかなどいろいろと考えました。

今回は、比較的若い層にも来ていただくために保育園や若い世代の方がみえる沿線の店舗にも協力をいただきチラシを置かせていただく事にしました。こういった活動のヒントを都市交通課の澤田さん、平田さんからいただきました。



6月 イベントに向けての準備

イベントの内容を決めてチラシを作成しました。保育園や一期家一笑さんに置かせていただきました。当日の計画の内容は以下の通りです。

時 間	内 容	担 当
10時30分	為金バス停にお迎え出発	竹中 田中
10時40分	お迎え以外の担当集合 (食堂前)	金子 渡辺 横山 小村 金城 佐橋
	準備 机の配置 牧野先生の準備補助 記録係打ち合わせ 写真係打ち合わせ 時計係打ち合わせ	バス迎え以外の全員 バス迎え以外の全員 金城 横山 佐橋
11時30分	開始 司会(参加の皆さんへのお礼と牧野先生の紹介) 一緒に花育する学生 ランチの用意をする学生 (ランチの着席を事前に考えておくこと)	お出迎え 金子 渡辺 竹中 田中 (食堂から運びます)
12時	花育終了 ランチ開始 司会 ランチの説明	司会 金子さん
12時30分	終了 お見送り 後片付け	みなさんで参加のお礼



花育体験

～かわきたバスに乗りまして～



花育とは・・・?
生け花やフラワーアレンジメント、心療学の行動療法等の考え方を融合させて考案されたもの。
今回、この花育を豊橋創造大学で実施します。
花育とは花の色を通して、ご自身の心機状態を察知していきます。
体験料、ランチ代はもちろんです!!
ランチは学内にあるコストリカのランチボックス
かわきたバス(バスミール号)は下地校区、津田校区、大村校区の3校
区と豊橋駅を結ぶコミュニティバスです。このバスに乗り、豊橋創造
大学まで来てみませんか?
バス下車後、大学まで私たちがお送りいたします。

かわきたバス第4便 (大人 800円) 徒歩 (10分程度) 渡し船で大学へ
豊橋駅前 乗車 11:00 乗車 11:15 乗車 11:40
10:50 11:14 11:35 11:40

お弁当とお茶タイム
11:45～12:45

渡し船で別岸 徒歩 (10分程度) かわきたバス第5便 (大人 800円)
豊橋駅前 乗車 12:00 乗車 12:15 乗車 12:40
12:00 12:00 12:15 12:40

申し込みについて

7名先着順です。
・日時
令和元年7月3日 11時30分から12時45分
・応募締切
令和元年7月2日 17時まで
・申込先
豊橋市役所都市交通課
0532-51-2620
(平日のみ受け付け)

主催: 豊橋創造大学短期大学部
共催: 豊橋市役所

7月 イベントの実施

「かわきたバスと牛川の渡しで創造大学へ、花育とランチ体験」という企画を実施しました。バスの定員の関係もありますので募集7名としましたところ8名の参加申込みをいただきました。

大学にお越しいただき、花育とランチ体験をしていただく約1時間の取り組みでしたが、写真を見ていただいてお分かりのように、皆さん楽しんでいただけました。次の何か大学で体験をしたいというお声をいただき、イベントは成功に終わりました。



実習の様子



ランチ体験の様子

みんな協力出来ていてとても良かったです。しかし、せっかく来ていただいたのに時間がギリギリで、メインの花育にあまり時間をかけられず急いでと急かしてしまった所は反省点だと思います。みんなの頑張りもあってたくさんの人に来ていただいたのは大成功だと思います。

自己評価 それぞれの能力に対して自己評価をしてください (□に○印をいれてください)

	レベル 1	レベル 2	レベル 3	レベル 4
1 地域課題の解決の為、 情報収集し分析する能力	インターネットや文献等を検索し、地域の課題解決のために、必要な情報収集をすることができ ☐	地域課題の解決のために関係者にヒヤリング (聴き取り調査) を行うことができ ☐	課題解決のために、様々な情報源から収集した情報を吟味して取捨選択することができ ☐	取捨選択した情報を課題解決の目的に合わせて論理的に分析することができ ☐
2 地域課題を解決する能力	地域の現状を把握することができ ☐	現状とあるべき姿のギャップを明らかにすることができ ☐	現状とあるべき姿のギャップを明らかにした上で、課題を設定することができ ☐	解決策を現実的に (具体的に) 計画することができ ☐
3 修得した知識・知見を 活用する力	これまでに修得した知識・知見を地域解決に活かしたいと思う ☐	これまでに修得した知識・知見を地域課題にどのように活用するか説明できる ☐	地域課題に対してどのようなアプローチが有効か理解することができ ☐	これまでに取得した知識・知見を地域課題の解決に活用することができ ☐
4 グループを引っ張る力	グループ活動において自ら意欲的に取り組むことができる ☐	グループ活動において自らのグループ活動の目的を設定することができ ☐	メンバーとの議論において自ら主張を出し、かつメンバーの様々な意見を引き出すことができる ☐	グループのメンバーのさまざまな対立点を解消し目的に合わせた意思決定をすることができ ☐
5 他者と協力する力	グループにおいて目的を有した協働活動を行うことができる ☐	グループ活動において目的をよく理解し、目的に合わせて段取りをすることができ ☐	他者の考えや予定等を調整し、協同作業を進めることができる ☐	目的に向かって協同作業に取り組む、最終的な成果を実現することができ ☐

他己評価

1から4の力を最も発揮していた人の名前をその枠に書いてください (同じ人である必要はありません。複数でも構いません)

	レベル 1	レベル 2	レベル 3	レベル 4
1 地域課題の解決の為、 情報収集し分析する能力	インターネットや文献等を検索し、地域の課題解決のために、必要な情報収集をすることができ ☐	地域課題の解決のために関係者にヒヤリング (聴き取り調査) を行うことができる ☐	課題解決のために、様々な情報源から収集した情報を吟味して取捨選択することができ ☐	取捨選択した情報を課題解決の目的に合わせて論理的に分析することができ ☐
2 地域課題を解決する能力	地域の現状を把握することができ ☐	現状とあるべき姿のギャップを明らかにすることができ ☐	現状とあるべき姿のギャップを明らかにした上で、課題を設定することができ ☐	解決策を現実的に (具体的に) 計画することができ ☐
3 修得した知識・知見を活用する力	これまでに修得した知識・知見を地域解決に活かしたいと思う ☐	これまでに修得した知識・知見を地域課題にどのように活用するか説明できる ☐	地域課題に対してどのようなアプローチが有効か理解することができ ☐	これまでに取得した知識・知見を地域課題の解決に活用することができ ☐
4 グループを引っ張る力	グループ活動において自ら意欲的に取り組むことができる ☐	グループ活動において自らのグループ活動の目的を設定することができ ☐	メンバーとの議論において自ら主張を出し、かつメンバーの様々な意見を引き出すことができる ☐	グループのメンバーのさまざまな対立点 (コンフリクト) を解消し目的に合わせた意思決定をすることができ ☐
5 他者と協力する力	グループにおいて目的を有した協働活動を行うことができる ☐	グループ活動において目的をよく理解し、目的に合わせて段取りをすることができ ☐	他者の考えや予定等を調整し、協同作業を進めることができる ☐	目的に向かって協同作業に取り組む、最終的な成果を実現することができ ☐